

られる助詞ですが、教本には大きく三つの場合に分けて例を擧げてあります。即ち

(イ)は方角 (ロ)は歸着するところ(場所) (ハ)は相手
を示すに用ひた例です。

古くは右の(イ)の場合には「へ」だけを用ひ、(ロ)の場合には「に」を用ひるのが普通でした。つまり「へ」は方角を表すだけでしたが、時が経つに従つて、次第に(ロ)の場合にも用ひられるやうになつたのです。しかも現在とても、(ロ)の場合に「に」を用ひることが、全くすたれたのではなく、教本の(ロ)の各例の「へ」を、總て「に」と言ひかへても通用するのです。

勿論どんな場合にも「に」「へ」の用ひ方が共通なのではなく、「に」の用ひ方は「へ」よりも廣いので、「に」は用ひられるが、「へ」は用ひられないといふやうな場合が少くありません。例へば教本「八一」の各例の「に」は、大抵「へ」に變へることは出来ません。

(231) 【八八】「も」(第三種)(一四二頁)

「も」の用法として、教本には二つの場合を擧げてあります。

(イ)は、「一」を擧げて他を推測させる「も」です。「私も鉛筆を買ひませう」といへば、鉛筆を買ふものは、自分以外にもあることを表し、「南京へも行きました」といへば、南京以外のところ、例へば北京とか上海とかに行つたことを表します。

(ロ)は、同趣の事物の累加に用ひる「も」です。「木も草もありません」は、無いものは木だけではなくて、その上に草が無いといふ意味になります。ですから之を「木がありません。また草がありません」を一まとめにして表現したものと見てよいと思ひます。

(注意) 教本には出してありませんが、「も」はいま一つの用ひ方があります。それは次の例のやうに、文中の意味を強めたり、和らげたりするに用ひるものです。

缺席者は一人も居りません。

よく見もしないで、かれこれいふ。

面白くもない話を聞かせられて、閉口した。

太郎は、人前に出て、別に恥かしいとも思ひません。

あそこに太郎があるかも知れません。

學校は公園よりもよほど遠くにあります。

(232) 【八九】「より」(第一種)(一四三頁)

「より」には二つの用ひ方があります。

(イ)比較の基準を示すに用ひる。この場合には「より」の下に、「は」「も」を附けることが少くありません。教本の例を見ると十分理解されるだらうと思ひます。

なほ日本語の形容詞・副詞には、比較に用ひる特別の形はなく、「より」によつて比較を表すのが普通です。

(注意) 「より」は必ず基準を示す語の下に附いて用ひられることは、教本の例

アルミニウムより… 昨日より…

弟より… 十圓より…

によつて明かです。このやうに、必ず他の語の下に附くのが助詞の特質です。然るに「より」を次の例のやうに、基準を示す語を略して用ひる人がありますが、それは日本語の正しい用法ではありません。

われ／＼は常に、よりよい生活を目ざして進んで来た。

今後は、より積極的に、より勇敢に活動しなければならぬ。

(3)「しか」(七三)参照)と同様に用ひる。この場合には教本の例のやうに、下に「ほかに」を附けることもあります。

(233)【九〇】「を」(第一種)(一四四)

「を」には二つの用法があります。

(1)他動詞と共に用ひる場合には、動作の對象を表す。

自動詞に使役の助動詞の附いたものと共に用ひる時、教本の「生徒を、休ませました」などのやうに、使役の對象、即ち使役されるものを表します。この例を二、三補つておきます。

子供を立たせる。 使を走らせる。 車を急がせる。

(2)自動詞と共に用ひる場合には、動作の行はれる場所を表す。教本には「階子を上る」「坂を下る」などの例を出してありますが、總ての自動詞にこの用法があるのではなく、「を」と共に用ひる自動詞は限られてゐます。

(234) 以上、教本にある助詞について述べましたが、助詞はまだその外にもあります。次にその主なものの例を挙げませう。

(235)「ぐらゐ(くらゐ)」「ほど」(第三種)

「ぐらゐ」「ほど」は、程度をおほよそにいふに用ひます。多くの場合、互に置き換へることが出来ますが、何れか一方に限つて用ひられることもあります。「ぐらゐ」は「くらゐ」といふことがあります。

あの人ぐらゐ「ほど」勉強する者は少い。

それぐらゐの事は、誰だつて知つてゐる。

それほどの事を、なぜ今まで話さなかつたのか。

中村は羨しいぐらゐ「ほど」繪が上手だ。
 ちよつと痛いぐらゐは、がまんなさい。
 少しぐらゐは、食べてもよからう。
 それを言はれるぐらゐ「ほど」恥かしいことはない。
 あそこまでぐらゐは、子供でも歩けるだらう。
 今日の映畫は、話に聞いてゐたほど面白くはなかつた。
 「くらゐ」はまた、次の例のやうに「この、その」等にも附きます。
 このくらゐの事に驚くものがあるか。
 そのくらゐの熱心なら成功するだらう。
 あのくらゐの愉快な事は、度々あるものではない。
 どのくらゐむづかしいのか、私には分かりません。
 「ほど」はまた、事柄に比例する意味を表すのに用ひます。
 この本は、讀めば讀むほど面白くなる。
 小さければ小さいほど値段がやすい。

(236)

こそ (第三種)

こそは文の中において、特に取立てて意味を強めていふに用ひます。
 私こそ大變御無沙汰致しました。
 今度こそ必ず勝つて見せませう。
 口をこそ出さないが、心の中には始終思つて居た。
 さうしてこそ立派な日本男兒だ。
 われ／＼は、空氣があればこそ、かうして生きてゐられるのだ。

(237)

さぞぞねよ (第三種)

これ等は總て文の終に用ひます。
 「さ」は軽い感動を表すに用ひる助詞で、名詞・代名詞・數詞・副詞に附いて述語を造ることもあります。

中村だつて映畫は見るさ。
 山の上は、勿論寒いさ。
 一時はみんなも驚いたさ。
 あれは學校さ。
 昨日話した本はこれさ。

飛行機に乗つたのは、たゞの一度さ。

あの人があることをするのはときどきさ。

「ぞ」は活用する語の第三形に附いて意味を強める助詞です。多くの場合、他に注意を促すに用ひます。

ちぎに雨が降るぞ。

君はおそいぞ。もつと早く歩き給へ。

あれは中村らしいぞ。みんなで呼んでみよう。

田中はもう歸つたぞ。君も早く歸り給へ。

「ね」は感動の意を表す助詞で、活用する語はその第三形に附きます。之を「ねえ」といふことがあります。

あそこに牛があるね。

今日はずるぶん暑いね。「ねえ」。

その花はきれいだね。「ねえ」。

あれは學校ですね。

あなたは、いつもお早うございますのね。「ねえ」。

中村さんも昨日歸りましたね。

「よ」は感動の意を表す助詞で、多く他に注意を促すに用ひます。活用する語にはその第三形に附きます。

雨が降つてゐるよ。傘を持って行き給へ。

私も行きますよ。少し待つて下さい。

今日はお祭で、大變賑かですよ。

あそこに茶店は無かつたよ。

運動場には誰も居ませんよ。

(238) 「でも」「など」「第三種」

共に文の中において、事柄を大概にいふに用ひます。けれども多くの場合、互に置き換へることは出来ません。

「でも」は多く、消極的讓歩の意味に用ひ、「など」は代表的なものを擧げる場合、又は特に精確な表現を避けて、和らげていふに用ひます。

お茶でも飲みませう。

せめて太郎でもゐると、使にやりたいが。

弟は公園へでも行つたのだらう。
 子供たちは、庭でも遊んでゐるでせう。
 妹の萬年筆は、叔母からでもいたゞいたのでせう。
 また雨でも「など」降つたら困りますから、もう歸ります。
 汽車に後れでも「など」したら大變です。
 なまける者などは、私の學校には一人も居りません。
 今朝田中君などから、手紙が來ました。
 昨日萬年筆や鉛筆などを買ひました。
 公園の花はあまりきれいでありませんよ。
 弟は「僕も早く日本へ行きたいな」などと申します。
 ながら「つつ」(第二種)
 「ながら」は動詞、助動詞「れる、られる、せる、させる」の第二形に付き、二つの動作・作用が同時に行はれることを表します。
 歩きながら考へる。
 食事をしながら話を聞いた。

(239)

風に吹かれながら橋の上に立つてゐる。
 これはまた照應しない二つの事柄を接続する場合に、「にも拘らず」「のに」の意味に用ひます。この場合には「つつ」を用ひることがあります。
 口ではりつばなことを言ひながら、少しも實行しない。
 二度も讀みながら、さつぱり記憶してゐない。
 自分で實際に見ながら、見たことがないといふ。
 悪いことと知りながら「つつ」うっかり言つてしまつた。
 忘れてはならないと思ひながら「つつ」、つい忘れてゐた。
 口語文では、「つつ」を「ある」と一緒に用ひて、動作・作用の繼續反覆を表すことができます。
 工事は順調に進行しつゝある。
 目下交渉しつゝある事件。

(240)

「なり」「や」「やら」(第三種)
 共に並列に用ひる助詞です。
 「なり」は語を並列して、選擇する意味を表すのに用ひます。即ち教本「六八」の「か」の

用ひ方と同じです。

紅茶なりコーヒーなり、直ぐ持つて来て下さい。

中村なり武田なり、誰か残つて居なければなるまい。

賛成するなり反對するなり、早くきめ給へ。

大きくなり小さくなり、思ふ通りこしらへて御覽下さい。

電車でなり汽車でなり、早く出かけませう。

「や」「やら」は、並列した事物と限らずに、その種類の幾つかを擧げる心持でいふに用ひます。

太郎も電車や汽車の繪が好きです。

日曜日や祭日には、成るべく遠足に出かけます。

弟はあれやこれや、いろ／＼ほしがります。

あの帽子は、五圓や十圓では買へないだらう。

右の如く「や」は名詞・代名詞・數詞に附くのが普通です。

机の上には、鉛筆や紙や、いろ／＼載つてゐます。

明日もあなたやら中村君やらに手傳つてもらひたい。

子供たちは、わめくやら歌ふやらで、大騒ぎをして居ります。

靴も大きいのやら小さいのやら、澤山並べてあります。

「やら」はまた次の例のやうに不明の意味を表すのに用ひます。

私も誰やらから、その話を聞きました。

あそこに何があるやら、少しも知らなかつた。

演説の始まるのは何時からやら、私も聞いて居ません。

太郎は何處へやら行くと言つて、さつき出かけました。

第二部練習

練習一 (一〇頁)

次の数を言つてごらんなさい。

- | | | | | | |
|---------|-----------------|----------|-------------------|-------|-----------|
| 25 | (二十五) | 89 | (八十九) | 158 | (百四十八) |
| 718 | (七百十三) | 808 | (八百六) | 910 | (九百十) |
| 1128 | (千百二十八) | 1209 | (千二百六十九) | 1038 | (千三十八) |
| 5987 | (五千九百八十七) | 7023 | (七千二十三) | 9802 | (九千六百二) |
| 12345 | (一萬二千三百四十五) | 16853 | (一萬六千八百五十三) | 58902 | (五萬三千九百二) |
| 70017 | (七萬十七) | 368962 | (三十五萬八千九百六十二) | | |
| 4736851 | (四百七十三萬六千八百五十一) | 38614579 | (三千八百六十一萬四千五百七十九) | | |
- 【注意】「四」を「ヨン」、「七」を「ナナ」、「九」を「キュウ」といふことがあります。ですから例へば「八十九」を「ハチジュウキュウ」、「百四十八」を「ヒャクヨンジュウハチ」

「七百十三」を「ナナヒャクジュウサン」ともいひます。また「二」を「フタ」といつて、例へば「三千三百五十一」を「サンセンフタヒャクゴジュウイチ」といふことがあります。次の文の——印の部分に適當な數詞におなほしなさい。

(1) 犬が一つ (一匹)

【注意】 犬・猫・鼠・牛・馬・豚の如き獸や、蛙・蛇・とかげなどの虫を數へるには「匹」を用ひます。これは一・六・十の時は「一匹・六匹・十匹」のやうに「ピキ」となり、三の時は「三匹」のやうに「ピキ」と發音します。

(2) 雑誌を二つ (二冊)

(3) 鶏が三つ (三羽)。一つ (一羽)「イチワ」。二つ (二羽)「ニワ」。

【注意】 「羽」は鳥を數へるに用ひます。これは一・二・四・五・七・八・九に附くと「ワ」と發音しますが、三に附くと「サンバ」六・十に附くと「ロツバ」「ジツバ」となります。なほ、稻・麥、その他の草や、薪などの束ねたものを數へるにも、同じく「イチワ」「サンバ」「ロツバ」のやうにいひますが、漢字で書く時には「一把」「三把」「六把」のやうに「把」の字を使ひます。

(4) 萬年筆を二つ (二本)。一つ (一本)

【注意】鉛筆・杖・髪の毛のやうなものを數へるには「本」を用ひます。これは「一・六・十」に附くと、「イッボン」「ロツボン」「ジッボン」のやうに「ボン」と發音します。

(5) 家が十 (十軒)

【注意】家を數へるには「軒」を用ひます。「一・六・十」に「軒」が附きますと、「イッケン」

「ロツケン」「ジッケン」のやうに發音します。

(6) 兎を五つ (五匹)。

【注意】「匹」については(1)で説明しました。

なほ兎は四足獸ながら、昔から之を鳥のやうに「一羽」「二羽」「三羽」と數へる地方がありますが、現在では犬・猫などのやうに「匹」を用ひるやうになつて來ました。

(7) 自動車が入つ (八臺)

【注意】馬車・荷車・人力車・自動車・自轉車などを數へるには「臺」を用ひます。

練習二 (一五頁)

次の動詞を打消になおす。

- 書く (書かない) 　　咲く (咲かない) 　　漕ぐ (漕がない)
- 押す (押さない) 　　出す (出さない) 　　勝つ (勝たない)

- 習ふ (習はない) 　　言ふ (言はない) 　　並ぶ (並ばない)
- 運ぶ (運ばない) 　　進む (進まない) 　　飲む (飲まない)
- 乗る (乗らない) 　　切る (切らない) 　　待つ (待たない)
- 笑ふ (笑はない) 　　眠る (眠らない)

【注意】問題には、後にいふ四段活用の動詞だけ擧げてありますから、「ない」は「書かない」「押さない」のやうに、ア段音に附ければよいのです。

練習三 (一六頁)

練習二の動詞に「ます」をお附けなさい。

- 書く (書きます) 　　咲く (咲きます) 　　漕ぐ (漕ぎます)
- 押す (押します) 　　出す (出します) 　　勝つ (勝ちます)
- 習ふ (習ひます) 　　言ふ (言ひます) 　　並ぶ (並びます)
- 運ぶ (運びます) 　　進む (進みます) 　　飲む (飲みます)
- 乗る (乗ります) 　　切る (切ります) 　　待つ (待ちます)
- 笑ふ (笑ひます) 　　眠る (眠ります)

【注意】「ます」は總ての動詞の第二形に附く助動詞ですから、右の四段活用の動詞には「書

さます」押します」のやうに、イ段音に附くのです。

練習四 (一七頁)

次の動詞を終に用ひて、短い文をお作りなさい。

- 吹く (ときどき、ひどい風が吹く。)
- 飛ぶ (燕はやく飛ぶ。)(あ、飛行機が飛ぶ。)
- 乗る (私は毎日自轉車に乗る。)(子供たちも池の舟に乗る。)
- 読む (兄は毎朝新聞を読む。)(弟は大きな聲で本を読む。)
- 出す (私はときどき鶏を籠の外へ出す。)(弟は雨が降ると、植木鉢を庭へ出す。)
- 習ふ (生徒は熱心に日本語を習ふ。)(生徒は中村先生に平假名の書き方を習ふ。)
- 走る (犬ははやく走る。)(私も、急いで歸る時は走る。)
- 泳ぐ (中村君は上手に泳ぐ。)(兄もときどき海に行つて泳ぐ。)
- 待つ (私はいつも門の前で父の歸るのを待つ。)(汽車の着くまで、待合室で待つ。)
- 洗ふ (毎朝、水で顔を洗ふ。)(私は食事の前に必ず手を洗ふ。)

練習五 (一八頁)

練習二の動詞に「ば」を附けてごらんなさい。

- | | | |
|----------|----------|----------|
| 書く (書けば) | 咲く (咲けば) | 漕ぐ (漕げば) |
| 押す (押せば) | 出す (出せば) | 勝つ (勝てば) |
| 習ふ (習へば) | 言ふ (言へば) | 並ぶ (並べば) |
| 運ぶ (運べば) | 進む (進めば) | 飲む (飲めば) |
| 乗る (乗れば) | 切る (切れば) | 待つ (待てば) |
| 笑ふ (笑へば) | 眠る (眠れば) | |

練習六 (二二頁)

次の動詞の四つの形をおあげなさい。

- 書く (書か 書き 書く 書け)
- 騒ぐ (騒が 騒ぎ 騒ぐ 騒げ)
- 喜ぶ (喜ば 喜び 喜ぶ 喜べ)
- 歸る (歸ら 歸り 歸る 歸れ)
- 行く (行か 行き 行く 行け)
- 打つ (打た 打ち 打つ 打て)
- 言ふ (言は 言ひ 言ふ 言へ)

カ四 ガ四 バ四 ラ四 カ四 タ四 ハ四

読む (讀ま)	読み	讀む	讀め	マ四
押す (押さ)	押し	押す	押せ	サ四
笑ふ (笑は)	笑ひ	笑ふ	笑へ	ハ四
泳ぐ (泳が)	泳ぎ	泳ぐ	泳げ	ガ四
噛む (噛ま)	噛み	噛む	噛め	マ四
吹く (吹か)	吹き	吹く	吹け	カ四
漕ぐ (漕が)	漕ぎ	漕ぐ	漕げ	ガ四
出す (出さ)	出し	出す	出せ	サ四
勝つ (勝た)	勝ち	勝つ	勝て	タ四
歌ふ (歌は)	歌ひ	歌ふ	歌へ	ハ四
運ぶ (運ば)	運び	運ぶ	運べ	バ四
沈む (沈ま)	沈み	沈む	沈め	マ四
取る (取ら)	取り	取る	取れ	ラ四
賣る (賣ら)	賣り	賣る	賣れ	ラ四

【注意】 練習六は、四段活用の動詞を挙げて、各四つの活用形を言はせる練習です。實際の

場合には、教本【110】の表にならつて

書かない。書きます。字を書く。書けば

のやうに、第一・二・四形にはそれぞれ「ない」「ます」「ば」を付けて考へさせ、第三形には上に適當の語を附けて、その動詞で言ひ切る形を考へさせるとよからうと思ひます。なほ参考の爲に、活用形の下に、活用の種類の名を記しておきました。「書く」の場合に「カ四」としたのは、「カ行四段活用」といふのを略したのです。他もこれと同様に記しておきました。

練習七 (二四頁)

次の動詞の四つの形をおあげなさい。

下りる (下り)	下り	下りる	下りれ	ラ上二
着る (き)	き	きる	きれ	カ上二
延びる (延び)	延び	延びる	延びれ	バ上二
逃げる (逃げ)	逃げ	逃げる	逃げれ	ガ下二
並べる (並べ)	並べ	並べる	並べれ	バ下二
分ける (分け)	分け	分ける	分けれ	カ下二

撫でる(撫で)	撫で	撫でる	撫でれ	ダ下一
數へる(數へ)	數へ	數へる	數へれ	ハ下一
忘れる(忘れ)	忘れ	忘れる	忘れれ	ラ下一
生きる(生き)	生き	生きる	生きれ	カ上一
居る(ゐ)	ゐ	ゐる	ゐれ	ワ上一
別れる(別れ)	別れ	別れる	別れれ	ラ下一
寝る(ね)	ね	ねる	ねれ	ナ下一
始める(始め)	始め	始める	始めれ	マ下一
立てる(立て)	立て	立てる	立てれ	タ下一
煮る(に)	に	にる	にれ	ナ上一
用ひる(用ひ)	用ひ	用ひる	用ひれ	ハ上一
比へる(比へ)	比へ	比へる	比へれ	バ下一
過ぎる(過ぎ)	過ぎ	過ぎる	過ぎれ	ガ上一

練習八 (二九頁)

次の動詞の活用の種類を言つてごらん下さい。(問題にはありませんが、各活用形をも記して

おきます。)

焼く	カ四(焼か)	焼か	焼き	焼く	焼け
急ぐ	ガ四(急が)	急が	急ぎ	急ぐ	急げ
貸す	サ四(貸さ)	貸さ	貸し	貸す	貸せ
負ける	カ下一(負け)	負け	負け	負ける	負けれ
流れる	ラ下一(流れ)	流れ	流れ	流れる	流れれ
光る	ラ四(光ら)	光ら	光り	光る	光れ
吸ふ	ハ四(吸は)	吸は	吸ひ	吸ふ	吸へ
出る	ダ下一(出で)	出で	出で	出る	出れ
考へる	ハ下一(考へ)	考へ	考へ	考へる	考へれ
浴びる	バ上一(浴び)	浴び	浴び	浴びる	浴びれ
汲む	マ四(汲ま)	汲ま	汲み	汲む	汲め
禁ずる	サ變(禁じ)	禁じ	禁じ	禁ずる	禁ずれ
刺す	サ四(刺さ)	刺さ	刺し	刺す	刺せ
殖える	ア下一(殖え)	殖え	殖え	殖える	殖えれ

見せる	サ下一(見)	せ	見せ	見せる	見せれ)
來る	カ、變(こ)		き	くる	くれ)
借りる	ラ上一(借)	り	借り	借りる	借りれ)
積む	マ四(積)	ま	積み	積む	積みめ)
死ぬ	ナ四(死)	な	死に	死ぬ	死ぬ)
旅行する	サ 變(旅行)	し	旅行し	旅行する	旅行すれ)
流す	サ四(流)	さ	流し	流す	流せ)
踊る	ラ四(踊)	ら	踊り	踊る	踊れ)
思ふ	ハ四(思)	は	思ひ	思ふ	思へ)
愛する	サ 變(愛)	し	愛し	愛する	愛すれ)
答へる	ハ下一(答)	へ	答へ	答へる	答へれ)
聞く	カ四(聞)	か	聞き	聞く	聞け)

【注意】「來る」は「きたる」と讀めば「ラ四」になります。「きたる」は文字言語には用ひませんが、音聲言語では殆ど用ひません。

練習九 (三一頁)

次の動詞に「う」「よう」を付けてごらん下さい。

行く、	う	行かう。	着る、	よう	着よう。
見せる、	よう	見せよう。	出す、	う	出さう。
考へる、	よう	考へよう。	言ふ、	う	言はう。
脱ぐ、	う	脱がう。	待つ、	う	待たう。
寝る、	よう	寝よう。	進む、	う	進まう。
別れる、	よう	別れよう。	勉強する、	よう	勉強しよう。
見る、	よう	見よう。	植ゑる、	よう	植ゑよう。
ゐる、	よう	ゐよう。	運ぶ、	う	運ばう。
休む、	う	休まう。			

【注意】練習九は、四段活用には「う」、その他の活用には「よう」を付けることを、はつきり知らせるのが一つの目的です。

第二に、「う」も「よう」も第一形に附くのですから、「ない」の附く動詞の形、例へば「行か」着」に附ければよいのです。この點では、書く場合は比較的に了解し易いかと思ひます。併し、四段活用に「う」の附いた場合の發音は紛れ易いから、それを正確に覚えさせ

たいのです。それで右の解答には、それ等に發音符號を付けておきました。

練習十 (三三頁)

次の動詞に「た」「て」を付けてごらん下さい。

- | | |
|-----------------|------------------|
| 出す (出した、出して) | 着る (着た、着て) |
| 投げる (投げた、投げて) | 命ずる (命じた、命じて) |
| 撫でる (撫でた、撫でて) | 聞える (聞えた、聞えて) |
| 倒れる (倒れた、倒れて) | 感ずる (感じた、感じて) |
| 鳴らす (鳴らした、鳴らして) | 見る (見た、見て) |
| 始める (始めた、始めて) | 旅行する (旅行した、旅行して) |
| 負ける (負けた、負けて) | 達する (達した、達して) |
| 動かす (動かした、動かして) | |

【注意】 こゝには、一段活用・カ變・サ變及び「サ四」の動詞しか出してありませんから、「た」「て」はその第二形に附ければよいのです。即ち「ます」の附く形に「た」「て」が附くと説明して分り易いことありませう。

練習十一 (三六頁)

次の動詞に「た」「て」を付けてごらん下さい。

- | | |
|--------------|--------------|
| 書く (書いた、書いて) | 漕ぐ (漕いだ、漕いで) |
| 持つ (持った、持つて) | 買う (買った、買って) |
| 休む (休んだ、休んで) | 鳴る (鳴った、鳴つて) |
| 打つ (打った、打つて) | 焼く (焼いた、焼いて) |
| 運ぶ (運んだ、運んで) | 噛む (噛んだ、噛んで) |
| 折る (折った、折つて) | 押す (押した、押して) |
| 洗ふ (洗った、洗つて) | 騒ぐ (騒いだ、騒いで) |
| 喜ぶ (喜んだ、喜んで) | 光る (光った、光つて) |
| 巻く (巻いた、巻いて) | 待つ (待った、待つて) |
| 思ふ (思つた、思つて) | 消す (消した、消して) |
| 繫ぐ (繫いだ、繫いで) | 踏む (踏んだ、踏んで) |

【注意】 こゝには、四段活用に「た」「て」の附く題を出しました。その中「サ四」の「押す」「消す」だけは第二形に附きますが、他は全部第五形に附きます。

練習十二 (三八頁)

次の動詞に適當の名詞、及び「ば」を付けてもらいなさい。
進む（海上を進む船。進む時計。味方が進めば敵が退く。）

別れる（別れる人。別れる時が来た。今別れば、長く逢へないだらう。）

勉強する（勉強するへや。日本語を勉強する生徒。勉強すれば成績がよくなる。）

見る（映畫を見る暇も無い。繪を見る子供。實際に見れば、よく分る。）

言ふ（ごごとを言ふ人。あの人の言ふことは、分りにくい。早く言へばいいのに

行く（學校に行く途中。買物に行く人。君が行けば、みんなが喜ぶだらう。）

着る（これは晝間着る着物です。此處には外套を着る人は居りません。上着を着れば暑過ぎる。）

待つ（待つ時間は長く思はれる。汽車を待つ人。もう五分待てば汽車が着く。）

脱ぐ（上衣を脱ぐ人。晴着を脱ぐ時。上衣を脱げば涼し過ぎる。）

禁ずる（入場を禁ずる張紙。撮影を禁ずる規則。夜間の外出を禁ずれば、危険は無くなるだらう。）

出す（かねいれ錢入から出す札。袂から出すハンカチ。切口から芽を出す木。車の外に顔を出せば、あぶなさい。）

考へる（忙しくて何も考へる暇が無い。よく考へることが必要だ。少し考へれば、すぐ分かる。）

思ふ（讀みたいと思ふ本が無い。讀みたいと思ふ人には、之を貸してあげよう。讀みたいと思へば、いつでも讀める。）

見せる（子供に見せる繪本を買った。これは君達に見せる物ではない。その手紙は中田君にも見せればさう。）

歌ふ（國歌を歌ふ時は、姿勢を正しきなさい。次に歌ふ人はどなたでせう。私が歌へば、弟も歌ひます。）

練習十三（四〇頁）

次の——印の動詞を、普通の命令の形と、丁寧な命令の形とにお直しなさい。

- (1) そこに立つ。(立て。お立ちなさい。)
- (2) 二階から下へおろす。(おろろ。おろいなさい。)
- (3) もう一度よく考へる。(考へろ。お考へなさい。)
- (4) 私にもそれを見せる。(見せろ。お見せなさい。)
- (5) 十一時までには歸る。(歸れ。お歸りなさい。)

(6) 手紙を書く。(書け。お書きなさい。)

(7) 仕事を丁寧にする。(しろ。おしなさい。)

【注意一】 (7)の場合には、「丁寧になさい」ともいひますが、「おしなさい」よりも丁寧の度が薄くなります。

【注意二】 右の丁寧な言ひ方を、學校では先生が生徒に對して、「立ちなさい」「読みなさい」のやうに「お」を附けずに用ひて居られるかも知れませんが、實際の談話には「お」を附けるのが普通ですから、この點特に注意する必要があります。

練習十四 (四四頁)

次の形容詞に「う」を附けてごらんなさい。

- 長い (長からう) 短い (短からう)
- 太い (太からう) 細い (細からう)
- 善い (善からう) 悪い (悪からう)
- 赤い (赤からう) 白い (白からう)
- 黒い (黒からう) 青い (青からう)
- 暑い (暑からう) 涼しい (涼しからう)

明るう (明るからう)

暗う (暗からう)

面白う (面白からう)

烈しう (烈しからう)

練習十五 (四七頁)

練習十四の形容詞を打消になさい。

- 長い (長く「は」ありません。 長く「は」ございませぬ。)
- 短い (短く「は」ありません。 短く「は」ございませぬ。)
- 太い (太く「は」ありません。 太く「は」ございませぬ。)
- 細い (細く「は」ありません。 細く「は」ございませぬ。)
- 善い (善く「は」ありません。 善く「は」ございませぬ。)
- 悪い (悪く「は」ありません。 悪く「は」ございませぬ。)
- 赤い (赤く「は」ありません。 赤く「は」ございませぬ。)
- 白い (白く「は」ありません。 白く「は」ございませぬ。)
- 黒い (黒く「は」ありません。 黒く「は」ございませぬ。)
- 青い (青く「は」ありません。 青く「は」ございませぬ。)
- 暑い (暑く「は」ありません。 暑く「は」ございませぬ。)

涼しい (涼しく「は」ない。涼しく「は」ありません。涼しく「は」ごちやいません。)
 明るしい (明るく「は」ない。明るく「は」ありません。明るく「は」ごちやいません。)
 暗しい (暗く「は」ない。暗く「は」ありません。暗く「は」ごちやいません。)
 面白しい (面白く「は」ない。面白く「は」ありません。面白く「は」ごちやいません。)
 烈しい (烈しく「は」ない。烈しく「は」ありません。烈しく「は」ごちやいません。)

練習十六 (四七頁)

次の各組の語を續けて言つてごらんなさい。

狭い、なる (狭くなる)	厚い、する (厚くする)
軽い、打つ (軽く打つ)	大きい、見える (大きく見える)
新しい、造る (新しく造る)	黒い、寫る (黒く寫る)
よい、遊ぶ (よく遊ぶ)	烈しい、戦ふ (烈しく戦ふ)
早い、起きる (早く起きる)	嬉しい、思ふ (嬉しく思ふ)
かたい、結ぶ (かたく結ぶ)	遅い、歸る (遅く歸る)
面白しい、話す (面白く話す)	長い、續く (長く續く)
白しい、光る (白く光る)	

練習十七 (四九頁)

次の形容詞を終に用ひた簡単な文をお作りなさい。

暑 しい (今日は昨日よりも暑^い。 南の國は一般に暑^い。)
 長 しい (この紐はたいへん長^い。 勉強する時間は、二時間よりも長^い。)
 青 しい (空の色は青^い。 この本の表紙も青^い。)
 忙しい (私はいつも忙^い。 弟も仕事が多くてたいへん忙^い。)
 早 しい (開會にはまだ早^い。 弟の歸る時間は兄よりも早^い。)
 あかるい (あの部屋はたいへんあか^い。 今夜は月が出てゐるので、まだあか^い。)
 古 しい (私の本はあなたのためよりも古^い。 そんな考へはもう古^い。)
 をかしい (あの繪を見ると、いつでもをか^い。)

【注意】 「をかしい」は、笑ひたくなる意味の外に、左例のやうに「納得しかねる、不可解だ」や、「變だ」などの意味に用ひます。

君のいふことがをか^い。
をか^いいな、僕の萬年筆が見えないぞ。

練習十八 (四九頁)

練習十七の形容詞の下に、適當の名詞をお付けなさい。

- 暑 暑い日。 暑い夏。 暑い南の國。
 - 長 長い鉛筆。 長い紐。 長い道。
 - 青 青い空。 青い海。 青い着物。
 - 忙しい 忙しい仕事。 忙しい身體。 忙しい時。
 - 早い 早い時より早い出勤。 授業には一時間も早い時。
 - あかるい あかるい部屋。 あかるい電燈。
 - 古 古い本。 もつと古い帽子。 一番古い靴。
- をかしい（をかしい時には笑へ。 ふとをかしい事を思ひ出した。）

練習十九（四九頁）

次の形容詞に「だらう」「でせう」「と」「が」「から」の附いた簡単な文をお作りなさい。

- 多い（今日は人出が多いだらう。「多いでせう。」
- 子供が多いと、賑かになる。
- あの山には木が多いが、運んで來られない。
- この邊は川が多いから、船の便利がいい。）

- 熱い（鐵瓶の湯はまだ熱いだらう。「熱いでせう。」
- 湯が熱いと、水をうめるが早い。
- お茶はたいへん熱いが、おきさめるでせう。
- そのコーヒーはたいへん熱いから、すぐ飲んではいけません。）
- つめたい（山の上は、風がつめたいだらう。「つめたいでせう。」
- 風がつめたいと、手袋がほしくなる。
- 風がつめたいが、外套はいらない。
- 風がつめたいから、手袋をお持ちおなさい。）
- 深い（川の真中は、一番深いだらう。「深いでせう。」
- 川が深いと、魚がたくさん居ます。
- 川はかなり深いが、水がきれいで底が見える。
- あの川はかなり深いから、泳ぎの稽古が出来ます。）
- 浅い（この池は、あの川より浅いだらう。「浅いでせう。」
- あの池が浅いと、子供達の遊び場所とするのだがな。
- 川の上流は浅いが、下流には深いところがある。

川が浅いから、泳げない。

苦しい(日なたにゐるのは、苦しいだらう。「苦しいでせう。」)

仕事あまり苦しいと、やめなくなる。

私は苦しいが、がまんします。

仕事苦しいから、途中でやめる人が多い。

勇ましい(太郎君の劍舞は、どんなに勇ましいだらう。「勇ましいでせう。」)

太郎君の劍舞も、おしまひがもつと勇ましいと、申しぶんが無かつたがな。

兄は勇ましいが、弟はおだやかな方だ。

太郎君が勇ましいから、友達もみんな元氣だ。

練習二十 (五〇頁)

練習十七の形容詞に「ば」を付けてごらんなさい。

暑い(暑ければ上衣うわぎを脱がう。あまり暑ければ、水をあびませう。)

長い(紐があまり長ければ、おきりなさい。お話が長ければ、明日うかがひませう。)

青い(この繪は、空の色がもつと青ければ、いいと思ひます。)

忙しい(君が忙がしければ、中村君に頼ませう。明日忙がしければ、會議は明後日にし

よう。)

早い(もう二分早ければ、汽車に間に合ふのだつたがな。まだ早ければ、控所で待つてゐませう。)

あかるい(もう少しあかるければ、新聞が讀める。へやがあかるければ、氣持がよい。)

古い(君の辭書があまり古ければ、この新らしいのを上げませう。くだものは、古ければ、

味がまづくなる。)

をかしい(をかしければ、笑ふがよい。)

練習二十一 (五一頁)

次の形容詞に「た」をつけてごらんなさい。

熱い(さつき飲んだ茶は、たいへん熱かつた。あの温泉は今ほぬるいが、もとはかなり

熱かつた。)

つめたい(山の上は、風がつめたかつた。氷に手をついたら、たいへんつめたかつた。)

黒い(私の見た豚の毛は黒かつた。冬の上衣うわぎは黒かつた。)

暗い(昨夜は、外が暗かつた。あのへやは、もとは晝も暗かつた。)

新しい(この本も、買った時は新しかつた。中村君の帽子は、私のよりも新しかつた。)

勇ましい(生徒の體操は、たいそう勇ましかつた。 中村君の劍舞は、一番勇ましかつた。)
 強い(相撲では中村君が強かつた。 武田も若い時は(力が)強かつた。)
 すずしい(山の上はすずしかつた。 中村さんのへやに行つたら、ここよりもすずしかつた。)

弱い(私も子供の時は弱かつた。あの國も昔は軍に弱かつた。)
 大きい(昨日見た魚は、ずるぶん大きかつた。この町も昔はたいへん大きかつた。)
 小さい(その時分は、あの學校もまだ小さかつた。私の買つた弟の帽子は、少し小さかつた。)

正しい(よく聞いてみると、中村のいふことが正しかつた。 あの時の中村の主張は、確かに正しかつた。)

練習二十二 (五五頁)

次の形容詞に「う」を付けてごらんなさい。

明かだ(事情は彼には明かだらう。 その理由は、私が言はなくても明かだらう。)
 花やかだ(今夜の會場は、さぞ花やかだらう。 電燈やガスの光が、どんなに花やかだらう。)

はでだ(あの人の服装ははでだらう。 彼の生活は、かなりはでだらうと思ふ。)
 柔かだ(その毛は柔かだらう。 この肉は昨日食べたのより柔かだらう。)
 親切だ(あの店の人は、客扱が親切だらう。 中村君は友達に對して一番親切だらう。)
 丈夫だ(その箱は丈夫だらう。 中村君も近頃は丈夫だらう。)
 危険だ(一人で登山するのは危険だらう。 この邊の海は、波が高いから危険だらう。)
 豊富だ(あそこは産物が豊富だらう。 あの邊は植物の種類が豊富だらう。)

練習二十三 (五七頁)

次の形容詞を打消になさう。

賑かだ(あの町は、あまり賑かで「は」ない。 ————ありません。 ————ごさいません。)
 花やかだ(あのへやの裝飾は、花やかで「は」ない。 ————ありません。 ————ごさいません。)
 はでだ(あの着物の色は、はでで「は」ない。 ————ありません。 ————ごさいません。)
 柔かだ(この菓子は柔かで「は」ない。 ————ありません。 ————ごさいません。)
 丈夫だ(私の靴は丈夫で「は」ない。 ————ありません。 ————ごさいません。)
 弟は近頃丈夫で「は」ない。 ————ありません。 ————ごさいません。)

愉快だ (人と争ふのは、決して愉快で「は」ない。
ん。)

危険だ (あの山道は危険で「は」ない。
— ありません。 — ございませぬ。)

無事だ (あの村も近頃は無事で「は」ない。
— ありません。 — ございませぬ。)

安全だ (夜の一人歩きは安全で「は」ない。
— ありません。 — ございませぬ。)

有名だ (あそこはあまり有名で「は」ない。
— ありません。 — ございませぬ。)

練習二十四 (五八頁)

次の()の中に適當の音を補つて、下へ續けて言つてごらんなさい。

- (1) 穏か (に) 話す。
- (2) 火が盛ん (に) 燃える。
- (3) 丁寧 (に) お辭儀した。
- (4) ひよこが丈夫 (に) 育ちました。
- (5) 本を粗末 (に) するな。
- (6) 朗か (に) 笑ふ。
- (7) 若い時ははなやか (に) 暮した。

練習二十五 (六〇頁)

次の形容詞を終に用ひた簡単な文をお作りなさい。

- 明かだ (中村君の成功することは明かだ。 その事情は私には明かだ。)
- 立派だ (社長の部屋はなかなか立派だ。 中村君の態度は實に立派だ。)
- 朗かだ (弟は兄よりも朗かだ。 中村君の笑ひ方も朗かだ。)
- 花やかだ (會場の裝飾がたいへん花やかだ。 中田さんの生活は、なかなか花やかだ。)
- 有名だ (富士山は美しいので有名だ。 此處は米の産地として有名だ。 三人の兄弟のうちで、二男が一番有名だ。)
- 丁寧だ (中田さんのお辭儀は丁寧だ。 武田の教へ方も丁寧だ。)
- 親切だ (あの店の人はたいへん親切だ。 あの店は客扱が親切だ。)
- 僅かだ (大抵歸つて、残つてゐる者は僅かだ。 二つの長さの違ひは僅かだ。)

練習二十六 (六〇頁)

練習二十五の形容詞の下に適當な名詞をお付けなさい。

- 明かだ (明かな事實。 明かな道理。 明かな説明。)
- 立派だ (立派な着物。 立派な家。 立派な人。)

朗かだ (朗かな氣象。 朗かな人。)
花やかだ (花やかな模様。 花やかな夕日。)
有名だ (有名な人。 有名な町。 有名な山。)
丁寧だ (丁寧なあいさつ。 丁寧な教へ方。)
親切だ (親切な言葉。 親切な心。 親切な人。)
僅かだ (僅かな品物。 僅かな違ひ。)

練習二十七 (六〇頁)

次の形容詞の下に、「と」「が」「から」を付けて、簡単な文をお作りなさい。
静かだ (周囲が静かだと、勉強が出来る。 この邊は夜は静かだが、晝はさうくしい。
誰も居ないで静かだから、ゆつくり話さう。)
盛んだ (會がそんなに盛んだと、會員がますます殖えるだらう。 あの會も今は盛んだ
が、四年前までは振はなかつた。 中村は元氣が盛んだから、成功するまでやり通すだ
らう。)
丈夫だ (中村も身體がもつと丈夫だといいがね。 兄はいつも丈夫だが、弟はときく病
氣になる。 紐が丈夫だから、される心配がない。)

りつばだ (風采がりつばだと、心までりつばなやうに思はれる。 態度はりつばだが、演
説の内容には感心しない。 建物がりつばだから、見る者はみな驚く。)
不愉快だ (君が不愉快だと、僕が困る。 あそこへ行くのは不愉快だが、中村に會ひに行
かなければならない。 ここにゐるのは不愉快だから、もう歸らう。)
愉快だ (もつと愉快だといいがね。 君等と話してゐるのは愉快だが、遅くなるからもう
らう。 歸そんな話を聞くのが愉快だから、もつと話してくれ給へ。)
危険だ (途中がそんなに危険だと、うっかり行かれませんか。 夜の外出は危険だが、晝
は安全です。 一人で行くのは危険だから、三人で行つた。)

練習二十八 (六一頁)

次の形容詞に「ば」を付けてごらんなさい。
柔かだ (その肉が柔かならば、私も買ひませう。)
花やかだ (裝飾がそんなに花やかならば、會場はさだめしきれいだらう。)
はでだ (あの反物の色があまりはでならば、妹の着物にしよう。)
危険だ (夜の外出が危険ならば、晝のうちに用をすましておくがよい。)
有名だ (あの人がそんなに有名ならば、私も聞いてゐるはずだが。)

無事だ (この暑さにもみんなが無事ならば、こんな喜ばしいことはない。)
丈夫だ (その紐が丈夫ならば、これと取りかへておかう。)

練習二十九 (六三頁)

練習二十八の形容詞に「た」を付けてごらんさい。

柔かだ (昨日食べた肉は、柔かだつたが今日のは少しかたい。)

花やかだ (會場の装飾は、大變花やかだつた。)

はでだ (あの時分は、男の着物も、今よりははでだつたと思ふ。)

危険だ (雨が降つたので、山道はかなり危険だつた。)

有名だ (二十年ばかり前は、あの温泉もかなり有名だつたが、今は知つてゐる人もなからう。)

無事だ (私が行つた時は、あの村も無事だつた。)

丈夫だ (中村さんは身體が丈夫だつたから、あんな大事業にも成功したのです。)

練習三十 (六四頁)

次の一つくを丁寧な形になせう。

賑かだらう (賑かでせう)

賑かだ (賑かです)

賑かだつた (賑かでした)

親切だらう (親切でせう)

親切だ (親切です)

親切だつた (親切でした)

きれいだらう (きれいでせう)

きれいだ (きれいです)

きれいだつた (きれいでした)

盛んだらう (盛んでせう)

盛んだ (盛んです)

盛んだつた (盛んでした)

りつばだらう (りつばでせう)

りつばだ (りつばです)

りつばだつた (りつばでした)

静かだらう (静かでせう)

静かだ (静かです)

静かだつた (静かでした)

丈夫だらう (丈夫でせう)

丈夫だ (丈夫です)

丈夫だつた (丈夫でした)

明かだらう (明かでせう)

明かだ (明かです)

明かだつた (明かでした)

無事だらう (無事でせう)

無事だ (無事です)

無事だつた (無事でした)

練習三十一 (七〇頁)

次の副詞に修飾される言葉を付けてごらんさい。(修飾される言葉の紛れ易いものには○印)

を付けておきます。)

ほんたうに(—暑い。—きれいだ。—歸る。—學校だ。)

たくさん(—ある。—ゐる。—食べる。—買う。—見る。)

やつぱり(中村は今日も—五時に歸つた。今夜の月も—丸い。明日の会場も—

講堂です。缺席者は今日も—二人です。)

少し(—休もう。—買った。—足りない。—大きすぎる。—熱い。—青い。

—丈夫だ。—きれいだ。—ゆつくり讀め。)

すぐに(—歸る。—出かける。—讀みはじめた。—やめる。)

きつと(—來る。—參ります。私も夜ふかしは—やめる。午後には—雨が降るだ

らうと思ひます。)

よほど(—歩いた。—高い。—きれいだ。—静かになった。—はつきり見える。)

もう(—後れた。—終つた。—始まるだらう。—居ない。—遅い。)

とうとう(—やめた。—成功した。(雨が)—降り出した。)

そろそろ(—歩く。—始めませう。)

ちやうど(友達が—出かけるところでした。今夜の月は—丸い盆のやうです。)

ちきりに(私も—歸ります。あれから—雨が降り出しました。)

ちよつと(—見よう。—待つて下さい。—行つて來ます。—珍しい。—きれ

だ。)

しばらく(—待つ。—見て居た。—考へた。—休もう。)

全く(—さうだ。—何もない。—少しも知らなかつた。—有望な青年。—えら

い軍人。)

なかなか(—暑い。—活潑な青年。—承知しない。—すすめても—歌はない。)

【注意一】 この練習は、副詞とそれに修飾される言葉を挙げただけでは、實は不完全なので、どうしても一つの纏つた文の中に、それ等を表さなければなりません。こゝにはそれまでの答にしかねましたが、指導者において適宜取扱はれるやうに希望します。

【注意二】 練習三十一に出してある「ほんたうに、すぐに、ちきりに」などは、第二種形容詞の第二形とも考へられますが、しばらく從來の見方に従つて、副詞としておきました。

練習三十二 (七三頁)

次の文の() のところに、適當な接續詞をお入れなさい。

(1) 雨がひどく降りました。(が、けれども、でも、しかし) 私たちは濡れませんでした。

(2) うちには、犬も猫も居ます。(そのうへに、また、それから) 鬼も居ます。

(注意) 「そのうへに」は「そのうへ」ともいひます。

(3) 明朝は早く起きなければなりません。(ですから) 今夜は早く寝ませう。

(4) 卒業式には父(及び) 兄が参るはずです。

(注意) 右のやうな「及び」は、講演・口語文などに用ひることがありますが、談話には殆ど用ひません。(この指導書¹³⁰参照)

(5) あそこには川があります。(そのうへに、それから、また) 池もあります。

(5) 次の接續詞を用ひて、簡単な文を作つてごらん下さい。

そのうへ(太郎は兄から時計をもらつて、そのうへ、姉から万年筆を買つてもらひました。)

しかし(口でいふことはやさしいが、しかし實行することは容易ではない。)

だから(あの店の店員はみんな親切です。だから客が絶えないのです。)

または(旅行隊は今頃、大阪または神戸を見物してゐるはずです。)

けれども(中村君もずるぶる苦しいのです。けれども決して不平をいひません。)

練習三十三 (八一頁)

次の各組の語を續けてごらん下さい。

- (1) 書かない、た(書か、なかつ、た)
- (2) 見えない、する(見え、なく、する)
- (3) 知らない、ば(知ら、なけれ、ば)
- (4) 讀まない、た(讀ま、なかつ、た)
- (5) 行く、ない、でせう(行か、ない、でせ、う)
- (6) 流れる、ない、ば(流れ、なけれ、ば)
- (7) 来る、ない、なる(來、なく、なる)
- (8) ゐる、ない、人(ゐ、ない、人)
- (9) 買ふ、ない、でせう(買は、ない、でせ、う)
- (10) 勉強する、ない、た(勉強し、なかつ、た)

〔注意〕 答にも特に語と語との間に、を附けておきました。以下の練習題の答も同様です。

練習三十四 (八四頁)

次の各組の語を續けてごらん下さい。

- (1) 乗ります、ん(乗り、ませ、ん)

- (2) あります、う (あり、ませ、う)
- (3) 買う、ます (買ひ、ます)
- (4) 来る、ます、が (来、ます、が)
- (5) 寒くなる、ます、から (寒く、なり、ます、から)
- (6) 読む、ます、ば (読み、ますれ、ば)
- (7) 書く、ます、た (書き、まし、た)
- (8) 勉強する、ます、て (勉強し、まし、て)
- (9) 乗る、ます、ん (乗り、ませ、ん)
- (10) 見る、ます、う (見、ませ、う)
- (11) 考へる、ます、た (考へ、まし、た)
- (12) 植ゑる、ます、ば (植ゑ、ますれ、ば)

練習三十五 (八八頁)

次の各組の語を續けてごらん下さい。

- (1) 焼く、れる (焼か、れる)
- (2) 見る、られる (見、られる)

- (3) 入れる、られる (入れ、られる)
- (4) 投げる、られる (投げ、られる)
- (5) 動かす、れる (動かさ、れる)
- (6) 着る、られる (着、られる)
- (7) 飛ぶ、れる (飛ば、れる)
- (8) 忘れる、られる (忘れ、られる)
- (9) 進む、れる (進ま、れる)
- (10) 出る、られる (出、られる)

練習三十六 (八八頁)

次の動詞に受身の「れる」「られる」を付けてごらん下さい。

- | | |
|--------------|--------------|
| 流す (流さ、れる) | 考へる (考へ、られる) |
| 見せる (見せ、られる) | 急ぐ (急が、れる) |
| 来る (来、られる) | 借りる (借り、られる) |
| 積む (積み、れる) | 食べる (食べ、られる) |
| 読む (読み、れる) | 泣く (泣か、れる) |

- | | |
|--------------|--------------|
| 歸る (歸ら、れる) | 出す (出さ、れる) |
| 載せる (載せ、られる) | 聞く (聞か、れる) |
| 立つ (立た、れる) | 起きる (起き、られる) |
| 閉ぢる (閉ぢ、られる) | 逃げる (逃げ、られる) |
| 買ふ (買は、れる) | 用ひる (用ひ、られる) |
| 育てる (育て、られる) | 入れる (入れ、られる) |
| 乗る (乗ら、れる) | |

練習三十七 (九四頁)

次の各組の語を續けてごらんなさい。

- (1) 焼く、せる (焼か、せる)
- (2) 入れる、させる (入れ、させる)
- (3) 投げる、させる (投げ、させる)
- (4) 進む、せる (進ま、せる)
- (5) 見る、させる (見、させる)
- (6) 来る、させる (来、させる)

- (7) 讀む、せる (讀ま、せる)
- (8) 捨てる、させる (捨て、させる)
- (9) 泳ぐ、せる (泳が、せる)
- (10) 出す、せる (出さ、せる)

練習三十八 (九五頁)

次の動詞に助動詞「せる」「させる」をつけてごらんなさい。

- | | |
|--------------|--------------|
| 考へる (考へ、させる) | 急ぐ (急が、せる) |
| 積む (積ま、せる) | 泣く (泣か、せる) |
| 歸る (歸ら、せる) | 立つ (立た、せる) |
| 運ぶ (運ば、せる) | 起きる (起き、させる) |
| 閉ぢる (閉ぢ、させる) | 買ふ (買は、せる) |
| 用ひる (用ひ、させる) | 育てる (育て、させる) |
| 作る (作ら、せる) | はいる (はいら、せる) |
| 乗る (乗ら、せる) | ゐる (ゐ、させる) |
| 飲む (飲ま、せる) | 光る (光ら、せる) |

受ける (受け、させる)

練習三十九 (九七頁)

次の各組の語を續けてごらんなさい。

- (1) 書きたい、た (書き、たかつ、た)
- (2) 読みたい、なる (読み、たく、なる)
- (3) 見たい、ば (見、たけれ、ば)
- (4) 食べたい、ない (食べ、たく、ない)
- (5) 乗りたい、が (乗り、たい、が)
- (6) 居たい、人 (居、たい、人)
- (7) 着る、たい、でせう (着、たい、でせ、う)
- (8) 行く、たい、ない (行き、たく、ない)
- (9) 勉強する、たい、た (勉強し、たかつ、た)
- (10) 歸る、たい、ば (歸り、たけれ、ば)
- (11) 歌ふ、たい、ありません (歌ひ、たく、あり、ませ、ん)

練習四十 (一〇二頁)

次の各組の語を續けてごらんなさい。

- (1) 流す、た (流し、た)
- (2) 見る、た (見、た)
- (3) 流れる、た (流れ、た)
- (4) 来る、た (來、た)
- (5) 命ずる、た (命じ、た)
- (6) 書く、た (書い、た)
- (7) 泳ぐ、た (泳い、だ)
- (8) 打つ、た (打つ、た)
- (9) 買う、た (買つ、た)
- (10) 呼ぶ、た (呼ん、だ)
- (11) 踏む、た (踏ん、だ)
- (11) 乗る、た、人 (乗つ、た、人)
- (12) 歌ふ、た、ば (歌つ、たら、ば)
- (14) 賣る、た、でせう (賣つ、た、でせ、う)
- (15) 有る、た、う (有つ、たら、う)
- (16) 勉強する、た、が (勉強し、た、が)
- (17) 見る、た、から (見、た、から)
- (18) ゐる、た、ば (ゐ、たら、ば)
- (19) 読む、た、新聞 (讀ん、だ、新聞)
- (20) 倒れる、た、だらう (倒れ、た、だら、う)

練習四十一 (一〇九頁)

次の各組の語を續けてごらんなさい。

- (1) これは中村の帽子だ、う (——帽子、だら、う)
- (2) これは中村の帽子だ、た (——帽子、だつ、た)

- (3) 中村の帽子はこれです、た(——これ、でし、た)
- (4) あれは田中の帽子です、た(——帽子、でし、た)
- (5) 面白い本だ、ば、買ひませう(面白い、本、なら、ば、買ひ、ませ、う)
- (6) それは面白い本だ、ない(——面白い、本、で、ない)
- (7) これは私の本だ、ありません(——私、の、本、で、あり、ませ、ん)
- (8) あれは何だ、う(あれ、は、何、だら、う)
- (9) あれは雲です、う(——雲、でせ、う)
- (10) 昨日歌つたのはどなたです、た、か(——どなた、でし、た、か)

練習四十二 (一一〇頁)

次の文に「でせう」「だらう」を用ひて推量の意味をお加へなさい。

- (1) 級長は中村君です(——中村君、でせ、う。——中村君、だら、う)
- (2) 太郎のかいた繪はこれだ(——これ、でせ、う。——これ、だら、う)
- (3) 午後雨が降る(——降る、でせ、う。——降る、だら、う)
- (4) 中村君もぢきに來る(——來る、でせ、う。——來る、だら、う)
- (5) 山の上は寒い(——寒い、でせ、う。——寒い、だら、う)

- (6) 中村君はうちにゐない(——ゐ、ない、でせ、う。——ゐ、ない、だら、う)
- (7) 太郎も行きたい(——行き、たい、でせ、う。——行き、たい、だら、う)

練習四十三 (一一三頁)

次の各組の語を續けてごらんなさい。

- (1) あそこには私が行く、う(——行か、う)
- (2) 荷物は私が持ちます、う(持ち、ませ、う)
- (3) 來月旅行をする、よう、と思ひます(——旅行、を、し、よう、と思ひ、ます)
- (4) 私は外へ出る、よう、と思つて、立上りました(外、へ、出、よう、と、思つ、て——)
- (5) それが良い、う(それ、が、よから、う)
- (6) その箱は丈夫だ、う(——箱、は、丈夫だら、う)
- (7) 友達が待つてゐる、よう、から、私はすぐに出かけます(——待つ、て、ゐ、よう、か
ら——)
- (8) 太郎も出かける、よう、としてゐます(——出かけ、よう、と——)

附 録

主なる動詞・形容詞

動詞・形容詞のうち、普通に用ひるものを、活用の種類によつて排列した。

一、四段活用の動詞

明^あ 欺^あ 發^あ 歩^あ 行^あ 頂^あ 嘶^い 浮^う
カ四

動^う 嘯^う うなづ^う うめ^う 置^お 驚^お 趣^お 輝^ひ 書^か

搔^か 傾^か かわ^か 聞^き 築^き きらめ^き 碎^く 口説^く 扱^こ

咲^か 裂^か さしや^さ 敷^か 退^か 空^く 好^か 塞^か 背^か

焚^た 炊^た 抱^だ た^た 附^つ 突^つ つ^つ 續^つ つぶや^つ

つまづ^つ 貫^く 解^く 説^く 届^く とどろ^と 泣^く 鳴^く 歎^く 靡^く ぬかづ^ぬ 抜^く 退^く 除^く 視^く 吐^く 掃^く

履^は 彈^は 働^は 省^は 春め^は 引^ひ 退^ひ 彈^ひ 響^ひ 開^ひ 吹^ふ 拭^ふ 茸^ふ 蒔^ふ 撒^ふ 卷^く 招^く

磨^ひ 導^ひ 向^む 焼^く 湧^く 描^か をの^を をめ^を 方四

寛^く 漕^く 騒^く 凌^く すし^す 殺^く 注^く そよ^そ 繼^ぐ 繫^ぐ 研^ぐ 取次^ぐ 脱^ぐ 剝^ぐ 塞^ぐ 防^ぐ 跨^ぐ

貢^み 抱^も 柔ら^も 搖^ゆ サ四 明か^み 遊ば^あ 餘^あ 荒^あ 表^あ 生か^あ 致^あ 坐^あ 癒^あ 浮か^あ 動か^あ

附 録

二三七

二三六

うつす
うつぶす
促す
潤す
起す
押す
落す
威す
驚かす
座す
おびやかす
思召す
及ぼす
おろす
耀かす
隠す
かぶす

貸す
返す
枯らす
かわかす
聞召す
萌す
くだす
覆す
崩す
くゆらす
暮す
繰返す
凝らす
殺す
探す
指す
刺す

諭す
さます
晒す
示す
濕す
記す
すかす
過す
澄ます
濟ます
そゝのかす
聳かす
耕す
足す
出す
たじす
倒す

騙す
試す
散らす
遣す
潰す
費す
吊す
照らす
とかす
とさす
轟かす
飛ばす
通す
燈す
流す
なす
靡かす

直す
惱ます
均す
馴らす
鳴らす
逃がす
濁す
匂はす
濡らす
根さす
残す
延ばす
果す
外す
放す
話す
囁す

生やす
晴らす
浸す
響かす
冷す
翻す
臥す
降らす
減す
綻ばす
乾す
放す
ほのめかす
減す
申す
負かす
紛らかす

紛らす
増す
惑はす
廻はす
迷はす
亂す
めかす
廻らす
召す
○次の漢語を「サ四」の動詞として用ひることがある。
愛、嫁、化、賀、
解、期、歸、議、
供、激、坐、資、
辭、祝、熟、證、
稱、制、製、奏、
屬、對、託、諾、

敵、廢、駁、祕、
附、復、服、表、
評、摩、譯、約、
輸、有、要、浴、
勞、略、領、和、
タ四
過つ
穿つ
うつ
勝つ
育つ
たつ
保つ
放つ
待つ
満つ

持つ
ナ四
死ぬ（この一語だけ）
ハ四
商ふ
味はふ
扱ふ
あてがふ
あらがふ
争ふ
あふ
洗ふ
いさかふ
いさなふ
厭ふ

祝ふ
言ふ
うかぶ
失ふ
疑ふ
歌ふ
奪ふ
敬ふ
占ふ
潤ふ
補ふ
行ふ
襲ふ
負ふ
追ふ
覆ふ
思ふ

かゝづらふ
かこふ
かなふ
かふ
買ふ
飼ふ
構ふ
通ふ
からかふ
競ふ
嫌ふ
食ふ
食らふ
狂ふ
請ふ
逆らふ
さすらふ
誘ふ

さまよふ
さらふ
従ふ
慕ふ
しまふ
救ふ
吸ふ
住まふ
害ふ
そふ
揃ふ
戦ふ
たゞよふ
給ふ
ためらふ
足らふ
誓ふ

違ふ
使ふ
償ふ
繕ふ
衞ふ
とのふ
問ふ
とむらふ
伴なふ
なずらふ
習ふ
賑はふ
になふ
匂ふ
拭ふ
縫ふ
願ふ

狙ふ
宣ふ
呪ふ
計らふ
這ふ
拂ふ
拾ふ
ふるふ
振舞ふ
賄ふ
咀ふ
問違ふ
纏ふ
惑ふ
舞ふ
迷ふ
向かふ

貫ふ
養ふ
雇ふ
結ふ
粧ふ
醉ふ
煩ふ
笑ふ
遊ふ
浮ふ
選ふ
及ぶ
轉ぶ
叫ぶ
忍ぶ

尊ぶ
飛ぶ
並ぶ
運ぶ
學ぶ
結ぶ
嘔ぶ
嘔ぶ
呼ぶ
喜ぶ
マ四
憐む
編む
怪しむ
歩む
勇む

痛む
悼む
いつくしむ
營む
挑む
否む
忌む
疎む
うむ
怨む
羨む
屈む
圍む
かじかむ
悲しむ
擗む
刻む

含む
窪む
組む
汲む
悔む
苦しむ
好む
込む
さいなむ
さしはさむ
親しむ
沈む
萎む
染む
白む
縮む
荒む

進む
涼む
すすむ
嫉む
染む
巧む
嗜む
たゞずむ
疊む
樂しむ
頼む
たゆむ
たわむ
縮む
ついでむ
擗む
謹しむ

包む
蓄む
摘む
つむ
富む
慰む
和む
馴染む
泥む
涙ぐむ
惱む
憎む
睨む
盗む
ぬるむ
望む
臨む

飲む 勵む 挟む ひがむ 潜む ひるむ 含む 踏む ほしゑむ まどろむ 揉む 休む 止む 病む ゆがむ 緩む 讀む

力む 拜む 惜しむ 上ら 嘲る 漁る 暖まる 當る 預かる 集まる 侮る 煽る 炙る 餘る 操る

あやまる 改まる 有る 怒る 憤る 生捕る いたはる 至る 偽る 祈る いばる 入る 要る 煎る 彩る 受かる 承る

蹲る 埋まる うつる うなる 賣る 擇る 送る 怠る 怒る 起る 驕る 遅なはる 劣る 織る 屈まる かいる 嚙る

限る 翔る 驅る 陰る 重なる 飾る 畏まる 掠る 固まる 偏る 語る 騙る 代る 被る かへる 刈る 薫る

軋る 來たる きまる 切る 括る 潜る 腐る くすぶる 下る 覆る 加はる 配る 曇る 繰る 削る 蹴る 擦る

困る 断る 凍る 籠る 凝る 轉る 溯る 下る 探る 定まる 授かる 悟る さはる 遮る さへづる 去る 叱る

しくじる 茂る したゝる 鎮まる 縛る 絞る 締まる 濕る 知る 縫る 啜る 滑る 擦る 刷る 坐る 狹まる 迫る

備はる 染まる 剃る 反る 手繰る 助かる 携はる 奉る 迎る 高まる 集る たばかる 賜はる 溜まる だまる 便る 垂る

足る 契る ちぢまる 散る 散らかる 掌る 仕る 作る 傳はる 綴る 募る つまる 積る 連る 吊る 釣る 照る

附 録

滞る 止まる 取る ながる 名のる なぶる 直る 訛る 成る 鳴る 握る 濁る 鈍る 塗る 眠る 練る 残る

罵る のぼる 乗る 伸る はいる はかる 始まる 走る 憚る はびこる 放る 逸る 流る 張る 光る 浸る

捻る 翻る 廣まる 耽る 塞がる 太る 降る 振る 隔たる 減る 誇る 細る 進る 掘る 彫る 曲がる 捲くる

勝る 交はる 混る 跨がる 祭る 廻る 守る 參る みなざる 實のる 貪む 群がる 廻る 戻る 漏る 盛る 休まる

宿る 破る 遣る 譲る 揺る 横ぎる 横たはる 蘇る 寄る 依る 弱る 分かる 渡る 割る 治まる 踊る

終る

折る

居る

二、上一段活用の動詞

ア上一 射る 鑄る 老いる 悔いる 報いる カ上一 飽きる 生きる 起きる 着る 盡きる 出来る

ガ上一 過ぎる 案じる 甘んじる ザ上一 疎んじる 詠じる 映じる 演じる 應じる 重んじる 軽んじる

感じる 禁じる 吟じる 減じる 高じる 講じる 混じる 先んじる 散じる 准じる 生じる 乗じる 信じる 煎じる

誦んじる 損じる 歎じる 談じる 陳じる 通じる 轉じる 點じる 動じる 難じる 任じる 念じる 判じる 封じる

變じる 辨じる 辯じる 焙じる 報じる 命じる 安んじる 論じる ナ上一 似る 煮る

○右の「ザ上一」の動詞は「サ變」にも活用する。

ハ上一
生ひる
戀ひる
強ひる
干る
用ひる

ハ上一
浴びる
大人びる
帯びる
徴びる
神さびる

マ上一
媚びる
錆びる
伸びる
綻びる
亡びる
佗びる

ラ上一
惟みる
顧みる
鑑みる
試みる
見る
下りる

ワ上一
借りる
懲りる
足りる
率ゐる
用ゐる
居る

ア下一
甘える
癒える
得る
怯える
覺える
消える
聞える

越える
肥える
凍える
心得る
牙える
榮える
聳える
絶える

費える
とだえる
煮える
映える
生える
冷える
殖える
吠える

カ下一
見える
燃える
悶える
明ける
預ける
仰ける

生ける
埋ける
受ける
懸ける
驅ける
缺ける
傾ける
碎ける

三、下一段活用の動詞

ことづける
心がける
裂ける
避ける
授ける
向ける
退ける
助ける
煤ける
たける
助ける
手向ける
附ける
漬ける
續ける
とける
届ける

とろける
名づける
なまける
抜ける
ねぢける
退ける
ひける
開ける
耽ける
更ける
ふざける
ほどける
まうける
まける
焼ける
避ける
よろける

分ける
ガ下一
上げる
擧げる
掲げる
からげる
寛げる
焦げる
轉げる
さげる
捧げる
差上げる
妨げる
平げる
告げる
遂げる

サ下一
投げる
逃げる
剝げる
廣げる
申上げる
曲げる
柔げる
あせる
合せる
溶せる
失せる
被せる
看せる
濟せる
似せる

載せる
逆上せる
馳せる
伏せる
任せる
見せる
瘦せる
寄せる
ザ下一
混ぜる
（この一語だけ）
タ下一
あてる
あわてる
企てる

附
録

捨てる 育てる 立てる 果てる 隔てる 満てる

ダ下一
奏でる 出る 撫でる 抽んでる 秀でる 詣でる 愛でる 茹でる

ナ下一
重ねる 兼ねる 尋ねる 束ねる 束ねる 連ねる 寝る はねる 真似る 委ねる

ハ下一
與へる 詭へる 訴へる 憂へる

抑へる 抱へる 數へる かなへる 換へる 構へる 考へる 鍛へる 加へる 拵へる 答へる 堪へる 支へる 従へる 備へる 添へる 揃へる

貯へる 稱へる 湛へる 携へる 譬へる つかまへる 仕へる 支へる 傳へる 整へる 唱へる 捕へる 長らへる なぞらへる 控へる 震へる 經へる

混へる 間違へる 迎へる 辨へる 教へる 終へる

ハ下一
浮べる 焼ける 比べる 調べる 統べる 滑べる 食べる 並べる 延べる

述べる

マ下一
赤らめる 崇める 諦める 明める 暖める 集める 改める 諫める いぢめる 戒める 埋める 埋める 麻める 掠める

固める きはめる 清める 苦しめる 籠める 定める 醒める しかめる したゝめる 沈める 占める 締める 進める 責める 染める たしなめる 溜める

矯める ちりばめる 勤める 詰める 咎める 止める 留める 眺める 慰める なだめる 嘗める 始める 填める 早める 潜める 廣める 深める

含める 譽める まるめる 求める 休める 止める 歪める 緩める をさめる

ラ下一
呆れる あこがれる あばれる 溢れる 現れる 荒れる

入れる 生れる 賣れる 後れる 恐れる 溺れる 隠れる 枯れる 切れる くだびれる 崩れる 暮れる 呉れる 穢れる 焦れる 毀れる こぼれる

附 録

二四九

しやれる
じやれる
知れる
萎れる
勝れる
廢れる
逸れる

たゞれる
戯れる
倒れる
垂れる
疲れる
つぶれる
連れる

流れる
馴れる
濡れる
紛れる
免れる
亂れる
漏れる

やつれる
破れる
搖れる
よごれる
別れる
忘れる
割れる

折れる
ワ下
飢ゑる
植ゑる
かつゑる
据ゑる

四、カ行變格活用の動詞

來る (この一語だけ)

五、サ行變格活用の動詞

する (本來の語はこの語だけ。但し、これが他の語と複合して多くのサ變動詞をつくる)

六、第一種形容詞

赤い
ク活用

明るい
浅い

暖い
熱い

暑い
厚い

淡い
あぶない

甘い
あやふい
荒い
有難い
青い
うす(善)
潔い
痛い
薄い
うまい
うるさい
えらい
遅い
大きい
多い
重い
面白い

賢い
堅い
かはら
かゆい
からい
軽い
きたない
きつい
清い
臭い
くだらない
くどい
暗い
黒い
けぶ
けぶ
けぶ
けぶ
けぶ
けぶ
濃い

快い
怖い
強い
細かい
寒い
しつこ
澁い
しほから
白い
少い
すごい
すつば
鋭い
狭い
高い
尊い
たやす

だるい
小さい
近い
つめた
つまら
強い
つらい
遠い
無い
長い
名高い
にが
憎い
鈍い
眠い
早い
低い

ひどい
平たい
廣い
深い
太い
古い
細い
まづ
まる
短い
醜い
むご
めでた
もろ
やすい
柔かい
ゆるい

よ
弱
若
悪
幼
シク活用
悪
浅
新
怪
荒
あわたし
いかめし
勇まし
忙し
著し

忌々し
やまし
きらし
疑はし
美し
うや／＼し
恨めし
羨し
うるはし
嬉し
あし
奥ゆかし
怖ろし
大人し
夥し
重々し
神々し

香ばし
輝かし
悲し
軽々し
芳し
嚴し
口惜し
委し
悔し
苦し
險し
好もし
戀し
さう／＼し
さびし
騒がし
親し

しをらし
すさまじ
涼し
すばらし
せはし
たくまし
正し
樂し
頼もし
つ／＼し
乏し
長々し
懐かし
惱まし
涙ぐまし
憎らし
似つかはし

願はし
望まし
烈し
恥かし
甚だし
はな／＼し
はか／＼し
久し
等し
ひもじ
よさはし
欲し
まぎらはし
貧し
みぐるし
むづかし
むつまじ

空し
珍し
めめし

やかまし
やまし
やさし

ゆかしい
喜ばし
宜し

煩はし
若々し
をかし

惜し
ををし

七、第二種形容詞（形容動詞）

明かな
浅はかな
鮮かな
暖かな
あたりまへな
いやな
うら／＼かな
嚴かな
穩かな
大まかな
愚かな
おろそかな

かすかな
かはいさうな
氣長な
氣の毒な
急な
清らかな
健氣な
細かな
盛な
さわやかな
静かな
しなやかな

ぢみな
健かな
すなほな
ぞんざいな
大嫌な
大好な
確かな
平かな
平な
詳かな
でたらめな
なごやかな

斜な
滑らかな
賑かな
のどかな
のんきな
はでな
花やかな
遙かな
冷やかな
不似合な
下手な
別な

變な
朗かな
ほのかな
眞赤な
眞暗な
眞黒な
眞青な
眞白な
眞直な
まめな
まめやかな
稀な

眞丸まんなまな
 みじめな
 妙な
 安らかな
 柔かな
 豊かな
 緩やかな
 ○次の語も第二種形容詞の語幹として用ひる。

簡單、完全、
 寛大、奇怪、
 危険、奇抜、
 窮屈、勤勉、
 輕少、結構、
 嚴格、元氣、
 嚴重、高尚、
 滑稽、懇意、
 質素、實直、
 從順、重要、
 順當、正直、
 上手、上品、
 丈夫、親切、
 新鮮、親密、
 精確、贅澤、
 大儀、大變、
 達者、淡泊、

調法、丁寧、
 適切、適當、
 當然、得意、
 特別、煩雜、
 非常、必要、
 貧弱、不意、
 不快、無事、
 不順、不便、
 平易、平凡、
 便利、豊富、
 明瞭、面倒、
 厄介、勇敢、
 雄大、優美、
 有名、愉快、
 立派、冷淡、
 露骨

不許複製



昭和二十年 三月二十五日 印刷
 昭和二十年 三月三十日 發行

編纂者

文 部 省

發行者

東京都神田區三崎町一丁目二番地
 財團法人 日本語教育振興會
 代表者 長沼直兄

印刷者

東京都牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
 (東京一) 大日本印刷株式會社
 代表者 佐久間長吉郎

發行所

東京都神田區三崎町一丁目二番地
 財團法人 日本語教育振興會
 神田(25)一六二八番



FI9R-85

終

